

# 翻訳者の読む行為とその創造性について

齊藤 美野

立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科

## Abstract

This paper focuses on how translators read source texts and claims that the process of reading is creative and dynamic. The discussion starts with the difference between communication through written letters and through spoken words, explaining a metaphoric expression of “language’s death”. After introducing the ideas of hermeneutics, the paper describes the relationship between an author and a reader. The reader does not understand the writer’s “horizon”, but understands the text’s “horizon”. This idea of horizon is explained with the idea of Hans-Georg Gadamer. The reader interprets the text using his/her creativity, and the idea of “mimēsis” by Paul Ricoeur explains that the reader actively interprets the narrative text. In the last part of this paper, an example of translators’ creative interpretation is shown from the original text and English translational texts of the Japanese narrative *Night on the Milky Way Train* by Kenji Miyazawa.

## 1. はじめに

芸術作品である文学、特に物語の他言語への翻訳について論じる際、考えるべき要素は種々様々にあるが、その一つは、読者は物語を読むという行為をどのように行うのかと言う問題である。一人ひとりの読者は果たしてある一つの物語テキストをまったく同じように読むものだろうか。本稿では、読むという行為は読者が自身の考えを用い、時に独創的に、創造的に行うものと捉え、読書は受け身の姿勢で行われるものではなく、読者が主体的にテキストと関わり合うことであると考え、読む行為をそのように捉えることで、翻訳者の作業のうち異言語で作品を書き直す、書き表すという部分が広く認知されているのに比べてあまり注目されていない 翻訳者の読みの重要性がわかるだろう。本研究は、翻訳者も読者であるという観点から読み手の役割について考察していく。

対面で行われることが基本となる音声言語によるコミュニケーションと比べ、言葉の発信者と受信者に距離があることが多い文字言語によるコミュニケーションにはどういった特徴があるだろうか。文字言語の読み手は、解釈という行為を行い、その解釈行為の中では、読み手自身による意味の創造が行われると考えられる。この解釈という行為は翻訳者の読みについて考える上で重要であり、読みの創造性が物語の翻訳へどのように影響を与えるかを把握することに繋がる。

本稿では、読みについての解釈学のいくつかの理論を検討し、読み手とテキストとの関係や、個人がテキスト解釈に際して発揮する創造性について論じる。言葉の発信者、つまり物語の著者から離れている読み手はどのようにして意味を受け取るのか、そしてその受信した言葉は書き手が表したものと意味の上で差ができるのか。このような文字言語の性質や読む行為と翻訳との関係について考察し、それを翻訳研究に繋げたい。最後に、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」と英訳4作品から、翻訳者が原作

を創造的に読んだ例を示す。

## 2. 文字言語について

本稿の問いは、読者としての翻訳者が物語をどう読むかである。翻訳研究の対象となる物語は、印刷物である。即ち文字で書かれていて、翻訳者はその書かれた言葉を読むことにより、話を理解する。そこでまず、文字言語とはどのようなものか把握しておこう。文字言語は、「言語の死」と喩えられることがあるがそれはどうしてだろうか。さらに、死んでいる言葉を通じて書き手と読み手が繋がるのが可能なのか、読み手は文字から何を受け取るのか。

テキストは、誰が読んでもそこから同じ意味を取り出すというものではない。文字は、持続する形式と、保持されずに消えていく意味から成り立つ。言葉を文字として記すということは、コミュニケーションの方法としては特殊なものになるのかもしれない。音声言語と異なり、文字言語は、本来発せられては消えていくものであった言葉を紙面にとどめておく。一箇所に押しとどめ、固定し、半永久的に存在し続けるものにするのである。その形式は変わることなく紙上に残るが、時間の経過と共にそこに託された書き手の思い、つまり文字が持たされた意味は残ることはむしろ少なく、消えていく。文字言語は、

物質的存在に刻み込まれ、空間・時間的世界のなかに一痕跡として一遺棄されることを不可欠の条件とする以上、自らの消失可能性をなしでますことはできないのであり、それゆえ自己自身のうちに、意味の死と伝統の途絶の可能性を含んでいるのである。(高橋 1988: 200)

発信者から離れて紙面に残り続ける以上、意味が死ぬという可能性は否定できない。時間の経過に伴い、書き手からも書き手がいたコンテキストからも意味が解放される。そのことにより、本来の意味が風化していき、読者はそれを理解することができなくなる。読者にできることは、文字の本来の意味の理解ではなく、風化した意味の解釈だ。言葉の形の残存と意味の消失により文字言語は死んでいるという表現が成り立つのである。

読み手はこのような不確かな言葉を読み、解釈せねばならない。さらに、文字言語を介したコミュニケーションでは、言葉の発信者である書き手と受信者である読み手の間に距離がある。テキストを書く場に読み手はいないし、また読者がテキストを読む時には、通常はそれを書いた者と同じ場にいることはない。文字の書き手の前に、受け手である読み手が「不在 (absence)」(野家 1988, p.95)であることが、言葉が発信される上での条件である。それは、空間的な距離に加え、時間的距離でもあり得る。数百年前に書かれたテキストを現代に暮らす読者が読むことは可能だ。

このしごく当たり前のようなことも、音声言語によるコミュニケーションと比べると、実は特別なことだと気付く。音声言語を介してであれば、会話の参与者には共通の時間的並びに空間的枠組みが存在する。つまり相手が「現前 (presence)」(ibid.) している。しかし文字によるコミュニケーションでは、言葉の発信者である書き手と受信者である読み手は直接対面してはいない。この対話の相手が不在だということに加え、書き手が発信する文字が届くのは書き手にとって見知らぬ相手かもしれないこと、これが文字言語の大きな特徴である。

「受信者と発信者とが形作る特定のコンテキストから切り離され、予期せぬ『不在の読者』に手渡されてなお、十全な意味作用を発揮しうる」(ibid.: 96)ものが文字なのである。固定化された文字とはいえ、そこから読み取られる世界は動的なのだと考えられる。むしろ、文字が死んだ言葉として、意味から隔絶されているということが、動的な世界を生み出し得るのである。

死んだテキスト、つまり、生きいきした人間的な生活世界からぬきとられ、硬直して視覚的な凝固物となったテキストが、耐久性を手に入れ、その結果、潜在的には無数の生きた読者の手で、数かぎりない生きたコンテキストのなかによみがえるための力を手に入れる(オング 1991: 172)。

発信者が文字を書き記した時には不在だった読者がいつの瞬間か現れ、そしてその読者により解釈されることで、文字に再び生命が与えられるのだ。

コンテキスト、つまり言葉を発信する状況、発信者自身からも切り離されたものであるという文字の性質、さらに、文字の発信者と受信者が直接関わらないということが、言語の死という概念をつくり出す。そして死と見なされる文字言語の成立条件が、必然的に読者の解釈という行為を促す。この主観性が入り込んだ解釈という行為が、読み手の中でどう行われているのかを解釈学の考え方を参考に考えていく。

### 3. 解釈の創造性

解釈学は、神学や文献学と共に古くから存在するが、19世紀になりフリードリヒ・シュライエルマッハー(Friedrich Schleiermacher)により体系化され、精神科学(現在で言う人文科学全体)全体の基礎的学問として学ばれるようになった。19世紀末を過ぎると、ヴィルヘルム・ディルタイ(Wilhelm Dilthey)が、非合理的な部分も持ち合わせる人間がものごとを理解するとはどのようなことであるか考えるようになり、解釈学は聖書を始めとする文献の理解という当初の目的を超えて、伝承されてきた文献以外のあらゆる芸術、法律、歴史に加え、日々の所作にいたるまで、全てのものが持つ意味を解明しようというものになった。この解釈学という学問の研究に携わった学者の中からポール・リクール(Paul Ricoeur)やハンス＝ゲオルグ・ガダマー(Hans-Georg Gadamer)の読みに関する論を見ていく。

シュライエルマッハーや、ディルタイのロマン主義解釈学は、読むことにより読者がたどり着くべきものは、著者の意図や体験であるとした。例えばシュライエルマッハーは、解釈の主要課題として、語義について「著者の意図していた真の使用を見出すこと」(シュライエルマッハー 1984: 101)を挙げている。このような客観主義に対し、リクールやガダマーは異を唱える。リクール達は、書かれた言葉は、書き手からは分離したものとして捉えるべきだとしたのである。書き手と読み手が離れているということ、つまり両者のコンテキストが共通したものではないということにより、言葉の受け手(読者)が普遍化される。読者が不特定多数だということは、解釈が多様になされてよいのだということになる。換言すれば、意味は複数あるということになる。「テキストは文字の読める者なら誰に対しても宛てられている。意味の全時性とは、意味がどのような読み方に対しても開かれていることを意味する。」(リクール 1978a: 60)

何故物語は読者に解釈される必要があるのだろうか。テキストは記述されることにより、著者の意図やテキストが書かれた社会や文化からも解放され、自律したものとなる。文字を書くこと、刻字により、テキストの意味の自律性が生まれる。記述された言葉の意味はそれを書いた者の意図から分離される。文字言語を読み、了解することは、現前しない書き手をよみがえらせることでもなく、著者のいた状況を探すことでもないのだ。

解釈学の基盤的論理に、知のパースペクティブ性というものがある。これは、「人間の知がつねに特定の視点、立場に拘束され、つねに特定の角度からものごとを視るということ、逆にいえば、人間に現われるものごとはつねに特定の<sup>アスペクト</sup>局面、一定の姿においてしか現われないという現象性格のこと」(新田 1988: 6) だと言われる。著者の視点に立つということは、著者が「読者と異なる今ここ」に立つ者であるという点から考えても、到達できるものではないとすることができる。

読み手が文字を解釈する際に必要となるのが想像力である。読者は、書き手がテキストを記した時に存在していた場と時がどのようなものであったかについては、それを想像するしかない。書き手がどのような思考を文字で表したのか、つまり文字の意味は何であるのかを、読者が想像して作り出さなくてはならない。読み手個人の中で生き返る意味は、もはや書き手が言葉を発信した時に表した意味とは別のものであろう。全ての読み手は解釈者として、テキストを自由に読むのである。

テキストの中にある「不確定箇所」を読むと、「決定要因の欠如」と「意味の過剰」(リクール 2004b, p. 305) とに出会う。文字言語は著者の意図(コンテキスト)から分離されているため、指示が非明示的である。北村とリクールはこの間の事情を次のように述べている。

著者も状況もないテキストには現実が欠けている。しかしまさにこの現実欠如こそがテキストを自由にし、テキストをしてその世界の<sup>イマジナシオン</sup>投影を可能ならしめているのである。利用可能で操作可能な可視的現実、価値、期待、想像力などによって変容され、構成されたテキストの世界へと拡張するのである。(北村 2003, p. 69)

As readers, we may either remain in a kind of state of suspense as regards any kind of referred to reality, or we may imaginatively actualize the potential non-ostensive references of the text in a new situation, that of the reader. In the first case, we treat the text as a worldless entity. In the second, we create a new ostensive reference thanks to the kind of “execution” that the act of reading implies. (Ricoeur, 1976: 81)

読者がいる新しい状況の中で、テキストに潜在する非明示的指示を「現実化」(actualize)するのである。そうすることにより、物語作品が作りだされる。

テキストは、今、ここで、このテキストを読むものに、それが提示する世界の理解を要求し、解釈はその都度、そのテキストの世界連関のなかでの位置を確認することによって、テキストの構成する地平のなかに参入し、その世界を所有しようとするのである。(北村 op. cit.: 70)

テキストの指示対象が非明示的であること、また限定されていない状態をテキストの「遠隔性」(distanciation)と Ricoeur (1976) は呼ぶ。そして、読む行為の中では、その遠隔性を持つ、つまり疎遠であるテキストの意味を読者が自分のものとする「自属化」(appropriation)が行われる。自属化されることにより、疎外されていたテキストが生産的なもの、言い換えると読み手に取って有意義なものになるのだ。この自属化という考え方は、後に論じるガダマーの「地平の融合」という考え方と通じるところがある。

リクールは、音声による対面のコミュニケーションにおいて、コミュニケーションの参与者に共通の状況を、つまり参与者が指し示すことのできる現実の様相を指すような指示を「公然的<sup>オススタンツ</sup>」(リクール 1978b: 103) な指示と呼ぶ。他方、テキスト内の指示は、指で示すことができない、公然的ではないものだ。物語テキストにおける指示は、現実を指し示すものではなく、物語の作品の世界、その一つの世界について書かれているものであり、指示は非公然的となる。テキストの背後にある(現実世界の)何かを指すのではなく、作品の世界内での指示である。テキストは、テキスト内の指示を「公然的指示の限界から解放する」のであり、「状況的でない指示を示すため」(ibid.) に物語テキストは書かれるのだという。

要するに、テキストの書き手が何を指示していたかではなく、作品が繰り広げる世界を理解することが重要なのである。「作品のダイナミズム、すなわちそれが語るもの(意味)から、それがそれについて語るもの(指示)への作品の運動を、跡づけること」(ibid.: 104) がテキストを了解するということになる。作者のいた状況でも、読み手がいる状況でもなく、テキストの世界を捉えることが了解なのだ。これは、ガダマーの表現を借りれば、読者の地平と作者の地平との融合ではなく、読者の地平と作品の地平との融合ということになる。(「地平」、そして「地平の融合」については第5章で再度触れる。)

#### 4. ミメーシスの循環と物語読者

次に、リクールの「ミメーシス」(mimesis) の概念を通し物語作品を読むということについて論じる。リクールは、物語作品の成り立ちを読者も含めて捉えており、作品と読み手の関係を3重のミメーシスの循環として表している。ミメーシスとは、全ての芸術作品は自然の模倣だという紀元前5世紀頃のギリシャからある考え方であるが、リクールは単なる模倣という意味ではなく、「模倣的活動、模倣あるいは再現する能動的過程」という意味で使用しており、「模倣あるいは再現を、再現的作品への転換という力動的な意味に解すべき」(リクール 2004a: 60) としている。このミメーシスが3位相にわたりテキストの世界と読者のいる現実世界の間で行われ、物語が作品として完成するという。「何かを産み出すもの」(ibid.: 62)、それが、ミメーシス活動であり、現実世界を秩序立て、筋立て、そして筋立てられた物語を読者が再び現実世界で受け取ることにより、物語作品ができあがる。

3位相にわたるミメーシス活動のうち、ミメーシスⅡは、書き手による創造活動である。ミメーシスⅠは具体的な作品の制作が行われるミメーシスⅡの前過程である。ミメーシスⅢはミメーシスⅡの後続過程であり、読者の中に見出される。三つのミメーシスは循環して行われ、ミメーシスⅠから始まるとは限らないのだが、便宜的にまた、リクール自身もⅠから説明しているので、ミメーシスⅠから見ていく。

ミメーシスⅠは、「先形象化」(préfiguration)の段階である。この段階は、ミメーシスⅡにおける「統合形象化」(configuration)、即ち作品の制作への可能性を持つにとどまり、形あるものはまだできない。ミメーシスⅠは実践的領域であり、「概念のネットワーク」(ibid.: 103)による現実世界の秩序づけが行われる。人間の行動の世界を物理的な動きから区別し、人間の行動は目的や動機、そして行動主体を持つものであると理解することにより、行動の意味の解釈可能性を把握するのだ。つまり、ミメーシスⅠは、人間が行為の意味を前理解する活動である。意識的か無意識的かの差はあれ、人間は前提が何もない状態から行為することはできない。

ミメーシスⅠの次の段階に、具体的な作品の制作において作用する創造的なミメーシスⅡがあり、そこでは統合形象化が行われる。ミメーシスⅡでは、ミメーシスⅠで行われた行為の意味の解釈可能性が顕在化される。ミメーシスⅠの概念のネットワークをテキスト制作者が筋立てることにより、具体的なバリエーションとする。それは、単に継起するエピソードでしかなかった作品外の現実世界、人間の行動の世界を、発端、展開そして結末のある作品にすることである。この統合形象化により、出来事や小事件がばらばらに提示されたものであった現実世界から脈絡のあるストーリーが誕生する。

ミメーシスⅡにおいて制作された具体的な物語作品は、次の段階であるミメーシスⅢにおいて最終的に完成する。ミメーシスⅢでは、作品を受容する者により、筋をもとに人間の行動の世界の「再形象化」(refiguration)がなされる。どのような作品であっても規定されていない空所があり、それを規定するのが読者であるという意味で、読み手も作品の成立の要素に含まれるのである。

詩の世界、あるいは藝術作品の世界とは、あたかも宝探しのゲームの宝物のようにあらかじめ準備され、やがて発見されるべくその背後に隠されてあるものなのではない。そうではなく、それはその都度の出来事として、つまり創作され、受容され、解釈されるたびごとに、作品とその前に立つ人間との間に繰り広げられるものとして、創造され、発見され、指し示されるのである。(北村 op. cit.: 79)

本論において特に注目したいのは、このミメーシスⅢである。リクール(2004a)は、読み手が主体となるテキストの成立段階としてミメーシスⅢを提唱する。物語作品は、受容する者がいて、その者が作品を解釈することにより存在が認められる。そして、読み手は、他者である作品を想像力により受け取る。想像力は伝統のパラダイムと結びついているが、その結びつき方は可変的だという。「それは盲従的な応用から、あらゆる度合の『規制された歪曲』を経て、計算された逸脱までの両極の間にひろがっている。」(ibid.: 125) 読者が、どのように想像力を用い、作品を受けとめるかは、個人差のある行為なのである。

テキスト世界と読者世界との交叉により、物語を現実化—または自属化—するのがミメーシスⅢである。読者の関わりがあって初めてテキストが物語として成立する。この段階は、後で取り上げるガダマーの理論では、「適用」と呼ばれる。

〈ミメーシス活動の3位相〉

ミメーシスⅠ	先形象化；行動の意味の解釈可能性を前理解
ミメーシスⅡ	統合形象化；具体的な作品の制作
ミメーシスⅢ	再形象化；読者による作品の受容

以上の3位相にわたるミメーシスは、ミメーシスⅢで終わるのではなく、循環する。物語作品がこの循環をたどることにより、読者の世界との間に解釈学的循環が生まれる。

その循環を貫き通しているのは解釈学的力動性である。つまり、行為においても、制作においても、また受容においても、そこに働いているミメーシスに本質的なことは、一方において何かしらの前提を持ち、規則に縛られつつも、他方決してその束縛に甘んじることなく、逆にそれをバネとしてそこから飛躍してゆく、という力動性である。(北村 op. cit.: 132)

ミメーシスⅢにおいて読者は、作品を受け取ることにより新しい概念のネットワークに出会い、そのことで、読者自身の概念のネットワークが変化したり、増えたりし、世界を秩序づける仕方も変化する。そのようにして、読み手の世界の見方が変貌することは、ミメーシスⅢからミメーシスⅠへの動きを意味する。つまりミメーシスⅢが、ミメーシスⅠにおける意味の解釈可能性の再理解並びに、世界の再度の秩序づけを促すのだ。ミメーシスの3重の循環内に、読み手とテキストは相互に影響し合うという動的な関係が形成されているのである。この考え方は、次章で見るガダマーの論の中の「地平の融合」と類似する。

## 5. 読者の主観について

ここまで読者の関わりが物語を読む上で欠かせないという点を見てきて、読者の介入の中で想像力が用いられるということが明らかになった。読み手一人ひとりが自身の主観に基づき別様な読み方をするのであれば、読者の主観について考えてみる必要があるであろう。まず、ガダマーが展開した解釈学による読みの論を見よう。

始めに、ガダマーが考える文学の読みについて少し触れておく。

文書ほどわれわれにとって疎遠であると同時に理解を要求するものはない。[中略] 文書とそれにかかわるもの、すなわち文学は、精神の理解可能性がもっとも疎遠なものの中に外化したものである。文書ほど精神の純粋な痕跡と見なしうるものはないし、また文書ほど理解する精神に依存したものもない。文書を解読し、解釈する際には奇跡が起こるのである。つまりそこではなにか疎遠で死んでいたものが、まったく同時的なもの (Zugleichsein)、なじみ深いものへと変容するのである。(ガダマー 1986: 239)

第2章で述べた、文字言語の死の比喩はガダマーにも使われていて、さらに、読むという言葉の受け手の主体的な行為が、死んだ言葉を生き返らせるのだとしている。

ガダマーは、著書、『真理と方法 I』(1986)の中で、読みには必ず読者の主観が入るという話を述べている。その際重要な概念として「先入観」(Vorurteil)を挙げる。これは、読者がテキストを読む際に持っている想定を指す。先入観は解釈的状況のことであり、人間が対象的に認識することのできないものである。人は、常にそのような状況の中において、全てのものごとをその状況において理解する。ガダマーは、先入観を「地平」(Horizont)とも呼ぶ。人間は、自らが持つ地平において世界を認識する。それは、その地平から見えるものしか見ることができないということでもある。

しかし、先入観は、テキストを読む前になされた判断であり、読み進めていくうちに、それが確認される場合も、間違いだと気付く場合もある。先入観は、決して変わることのない確固としたものではなく、テキストを読むうちにどんどん変化していく動的なものである。作品に影響を受けて読み手に変化が起きるということだ。先入観をダイナミックなものとしたことにより「読者の数=作品の数」という方程式は成り立たなくなる。

先入観という概念は、読み手の個人的視点が全ての理解を生み出すことのようにも取れるが、ガダマーはそのような主観主義とは異なる考え方を提示する。読み手は誰であれ、人類の歴史の一員であり、そのことが、テキストを読む際にも関わってくる。積み重なってきたものが伝統として読み手にある読み方をさせるのである。歴史の中で、例えばフィクションのテキストはこのように理解されてきたという方法により読み手はフィクションを読み、解釈していくという考え方だ。人は解釈の伝統に従い、テキストに対する先入観を持つのだ。仮に、先入観など持たない、客観的判断をしているという読み手がいたとしても、その客観的判断でさえ、ある伝統によった観念ということになる。

しかし、全ての解釈が歴史と伝統により促されているものだと片付けられるだろうか。伝統的に許される解釈の可能性が複数ある場合、読み手は、何に基づいて一つの解釈を選ぶのだろうか。この問題について考える時、ガダマーは答えを相対主義(主観主義)には見出さない。歴史による解釈の方法は、それはあくまで対象(テキスト)に近づくことを可能にする「方向づけ」(ウォーソキー 2000, p. 147)なのだという。

ここで解釈学的循環という概念が持ち出される。解釈学的循環とは、形式的には、まずある部分を読むことにより全体の意味を予期または付与し、そして読み進めることにより全体を知り、始めに予想した意味は変更され得るということだ。もう一つには、先行理解と解釈の循環のことである。人間が持つ先入観がテキストを読み、解釈することにより修正される、そしてまた修正された先入観を持ちテキストを読むと前とは異なる解釈を行うようになるということだ。

このような読みの方法は、テキストが完全なものであるということを前提としている。テキストが一貫しているものであると考えた故に、自身の読みに矛盾が生じた時、それを改めるのだ。また一貫性に欠けるテキストに出会った際にも、このテキストは一貫性とはどういうものかという伝統に反しているものと捉え、あくまで規範的テキストは一貫性を持った完全なるものなのだという前提はくずれないという。しかし、いかにテキストが完全なものであっても、読者は先入観を持たずにテキストを解釈することはない。

テキストに書かれていることを理解しよう、信じようとする試みは、読み手が持つ伝統による先入観を「遊ばせる過程、それを検証の試練に直面させる過程」(ibid.: 156)となる。テキストを読み進める中で、自身の先入観により行った解釈を修正していく。このようにくるくる循環しながら解釈するのである。

解釈をする上での解釈者、つまり読者がテキストを相手に繰り広げる思考の展開を、ガダマーは対話的構造だと説明する。理解は読者の持つ先入観をそのままテキストに押しつけ、当てはめることから得られないし、主観を入れることなくテキストに絶対的に従うことから得られない。読者が歴史的意識を持ち、即ち自身の歴史性を自覚していて、そして「自己の知識の欠如認識と学習への意欲」(ibid.: 179)があることが真の理解の条件なのだ。詰るところ、我々がテキストを理解できるのは、それぞれの読者がテキストを理解する際の関心による。読者とテキストの間には、お互いに問いかけ、それぞれの問いにそれぞれが答えることができるという開かれた関係があるのだ。そして、両者の間に、読み手の関心にそって合意が得られた時に、理解ができたことになる。

ガダマーはこの合意を「地平の融合」(Horizontverschmelzung)と同じものだとする。地平の融合とは、テキストの地平(考え方、観点)と読み手の地平が合わさり、理解が得られることである。つまり、ガダマーは理解と合意を同等視している。テキストの地平と読者の地平が融合すると、あるテキストに対する読者が持つ歴史によって作られた先入観もしくは関心が、その読者にとって確定するような方法でまとめられる。テキストの意味を読者自身の状況に近づける、「適用」(Applikation)という行為がなされるのだ。これは、解釈しようとするテキストを読み手が現在いる状況に適用させることであり、テキストは、読み手が読むその瞬間、その状況ごとに常に異なる方法で理解されなくてはならないということである。さらに、対話において参加者が合意を得ながらコミュニケーションしていくように、読みの行為も対話のように進められ、読み手とテキストの関わり合いにより、読者の中に新しい観点を生み、歴史的な先入観に次の段階をもたらす。

この地平の融合という概念は、先述したリクールの自属化と似ており、リクール本人も似ていると書いているが(Ricoeur, op. cit.: 93)、テキストの意味を読み手が自身の中に取り込むこととしている点で同じような概念と考えることができる。解釈というのはつまり、著者の意図していた何かを発見する、のではなく、読者が作品を前に自己自身を了解することである。リクール(1978b)は、その行為は、自身の地平の投射なのではなく、地平の拡張であるとする。解釈行為は、読者がもともと持っていた地平にのみ基づき、そこから動くことなく了解、つまり投射するのではなく、テキスト世界の地平と行ったり来たり循環して、読者の地平を拡張する行為だという。

ガダマーやリクールの論を本論のテーマである翻訳者の読みと繋げて考えてみれば、翻訳者もまた、読み手の先入観(それは文化や時代など様々な要素と関連する)を持つのだと考えることができる。そして、読むという行為の目指すものは著者の意図ではなく、読み手の主観がテキストと合わさって生まれるものが、読みにより生まれる解釈だと捉えれば、翻訳作品を翻訳者が創造的に読みを行ったものとして分析することができる。

## 6. 事例

この章では、これまで述べてきた、翻訳者も読者であり原作を創造的に読むのだという観点から事例を見る。宮沢賢治著「銀河鉄道の夜」から一つ例を示す。四つの英訳を読み比べると、原作の一つの表現に対し4組の翻訳者が異なる訳出をしていることがわかる。訳出の仕方が異なるということは、本稿の論点から言えば、原作を読んで異なる解釈をしたということであり、それぞれの翻訳者が自身の解釈に基づき訳したことで、翻訳に差異が生じたのだということになる。以下に原作から一文とそ

の部分の四つの英訳を引用する。なお、特に注目したい部分に下線を引いた。

原作 : けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。(宮沢 1996: 82)

英訳 1 : It's just that, I mean, a person creates happiness around him when he does something good. (Miyazawa, 1996b: 83)

英訳 2 : "I don't know," Minoru replied, "but if you do something really good, that's the best present for a mother...so I guess she'll forgive me." (Miyazawa, 1996a: 52)

英訳 3 : But if everyone does what is good, that's the best happiness, right? (Miyazawa, 1991: 31)

英訳 4 : But doing something really good is what makes you most happy. (Miyazawa, 1987: 34)

このセリフは、物語の主人公であるジョバンニに対し友達のカムパネルラが、おっかさんが自分のことを許してくれるだろうかと言ったり、おっかさんの本当の幸いのためなら何でもすると言った後に言うものである。この場面からはカムパネルラが言っていることがよくわからず何か不安な気持ちを感じられるのみである。さらに物語を読み進めると、これはカムパネルラが友達を助けるために親よりも先に死んでしまったことを言っていたのだとわかるのだが、それでも、「いちばん幸なんだねえ」という言葉の意味はやはり曖昧であり、誰にとつての、どのような状態を言っているのかははっきりしない。4組の翻訳者は、「幸」をどのように読み取ったのだろうか。

英訳 3 は、誰の幸せとなるのかという点をぼかしたまま訳している。英訳 2 では、“the best present for a mother” (母親のための一番の贈り物) としてあり、カムパネルラの言う幸せは、母親に贈る幸せだということになっている。これは、カムパネルラの一つ前のセリフ、「ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう」(宮沢 1996: 70) との関連からの解釈だろう。カムパネルラが直前に言った内容から母親の幸せのことを意味していると捉えたのである。

英訳 1 は、“around him” (いいことをした人の周囲に) としていて、いいことをした本人のまわりに幸せが生まれるという訳になっている。本人を含めてまわりも皆が幸せを感じるということであるから、カムパネルラの母親も含まれることになる。英訳 4 は、幸せになるのは “you” (いいことをした人は皆) としているので、いいことをした人本人が皆幸せになるという読み方をしていることになる。

このように複数の英訳を読み比べてみると、それぞれの翻訳者が原作を異なる仕方で解釈していることがわかる。そしてそれは、読みが個人差のある主観的で動的な行為であり、翻訳者が原作の物語を創造的に読んでいるからだと考えられるのである。

## 7. おわりに

本稿は、翻訳者が原作の読み手であるという点に注目し、読むとはどのような行為であるかを考え

た。読みは個人の中で展開される解釈行為であり、それは、一つの正しい読みに収斂されるようなものではなく、それぞれの読者が創造的に解釈する行為であると捉えられる。

翻訳者が目指すべき「正しい翻訳」というものがあると考えたとしたら、そのような観念は、「正しい読み」という観念に基づくことになる。つまり、当然のこととして、もしくは無意識のうちに、ただ一つの「正しい読み」というものが存在し得ると考えていることになる。しかし、起点テキストがテキストとして成り立つためには、他者に受け取られ、読まれることが必要である。読み手がテキストの成立要素であるということは、テキストには単一の「正しい読み」があるのではなく、それぞれの読者の主観により読まれること、即ち多様な読みが行われ得るものだということである。読み手が起点テキストの成立に欠かせない以上、起点テキストのみに権威が与えられ、読みの創造性を安易に否定することは、テキストというものの性質が正しく捉えられていないことになる。そこで本稿は、原作を読み、解釈する行為は、翻訳行為がまさにそれに基づき行われるという理由から、翻訳研究の対象とすべき行為であると考え、解釈の創造性について論じた。今後はこの論考を基礎に物語の翻訳についてさらに多角的に考えていく必要がある。(本稿は、立教大学大学院修士論文『翻訳における創造性：「銀河鉄道の夜」の英訳を事例に』(2006) [未刊行] の一部をもとに構成したものである。)

---

著者紹介： 齊藤美野 (SAITO, Mino) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科後期課程在籍。  
文学作品を題材とした翻訳研究に哲学・思想面から取り組む。  
連絡先： minosaito@jcom.home.ne.jp

---

#### 参考文献

- Miyazawa, K. (1987). *Night train to the stars. Night train to the stars and other stories.* (J. Bester, Trans.). Tokyo: Kodansha.
- Miyazawa, K. (1991). *Night on the Milky Way railway.* (S. M. Strong, Trans.). New York: M.E. Sharp.
- Miyazawa, K. (1996a). *Milky Way railroad.* (J. Sigrist & D. M. Stroud, Trans.). Berkeley: Stone Bridge Press.
- Miyazawa, K. (1996b). *Night on the Milky Way train.* 『英語で読む銀河鉄道の夜』(ロジャー・パルバー・ス・訳). 筑摩書房
- Ricoeur, P. (1976). *Interpretation theory: Discourse and the surplus of meaning.* Texas: Texas Christian University Press.
- ガダマー, H=G. (1986) 『真理と方法 I』(齋田収・麻生建・三島憲一・北川東子・我田広之・大石紀一郎・訳) 法政大学出版局 [原著: Gadamer, H-G. (1960). *Wahrheit und Methode.* Tübingen: J. C. B. Mohr]
- 北村清彦 (2003) 『藝術解釈学：ポール・リクール主題による変奏』北海道大学図書刊行会
- 宮沢賢治 (1996) *Night on the Milky Way train.* 『英語で読む銀河鉄道の夜』(ロジャー・パルバー・ス・訳) 筑摩書房
- 新田義弘 (1988) 「解釈学の論理とその展開」現象学・解釈学研究会 (編) 『現象学と解釈学 (上)』(3-35 頁) 世界書院

- 野家啓一 (1988) 『言語論的現象学』の可能性と限界」現象学・解釈学研究会 (編) 『現象学と解釈学 (上)』 (77-103 頁) 世界書院
- オング, W. J. (1991) 『声の文化と文字の文化』 (桜井直文・林正寛・糟谷啓介・訳) 藤原書店  
 [原著 : Ong, W. J. (1982). *Orality and literacy: The technologizing of the word*. London: Methuen]
- リクール, P. (1978a) 「言述における出来事と意味」久米博・清水誠・久重忠夫 (編訳) 『解釈の革新』 (46-63 頁) 白水社 [原著 : Ricoeur, P. (1971). *Événement et sens dans le discours*. In M. Philibert (Ed.), *Ricoeur ou la liberté selon l'espérance*. Paris: Seghers]
- リクール, P. (1978b) 「隠喩と解釈学の中心問題」久米博・清水誠・久重忠夫 (編訳) 『解釈の革新』 (84-111 頁) 白水社 [原著 : Ricoeur, P. (1972). *La métamorphose et le problème central de l'herméneutique*. *Revue Philosophique de Louvain*.]
- リクール, P. (2004a) 『時間と物語 I : 物語と時間性の循環／歴史と物語』 (久米博・訳) 新曜社  
 [原著 : Ricoeur, P. (1983). *Temps et récit tome I*. Paris: Éditions du Seuil]
- リクール, P. (2004b) 『時間と物語 III : 物語られる時間』 (久米博・訳) 新曜社 [原著 : Ricoeur, P. (1985). *Temps et récit tome III*. Paris: Éditions du Seuil]
- シュライエルマッハー, FR. D. E. (1984) 「第一草稿 (一八〇九／一〇年) : 解釈学第一草稿」久野昭・天野雅郎 (編訳) 『解釈学の構想』 (73-122 頁) 以文社 [原著 : Schleiermacher, FR. D. E. (1959). *Der erste Entwurf aus der Zeit zwischen 1810 und 1819: Hermeneutik Erster Entwurf*. In H. Kimmeler (Ed.), *Hermeneutik/ FR. D. E. Schleiermacher: nach den Handschriften neu herausgegeben und eingeleitet von Heinz Kimmeler*. (pp. 51-76). Heidelberg: Carl Winter, Universitätsverlag]
- 高橋哲哉 (1988) 「テキストの解釈学」現象学・解釈学研究会 (編) 『現象学と解釈学 (上)』 (183-212 頁) 世界書院
- ウォーナーキー, G. (2000) 『ガダマーの世界 : 解釈学の射程』 (佐々木一也・訳) 紀伊国屋書店  
 [原著 : Warnke, G. (1987). *Gadamer: Hermeneutics, tradition and reason*. Oxford: Blackwell]